

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830059

研究課題名（和文） 安全・安心な食の流通のための情報伝達制度設計

研究課題名（英文） Strategic information transition' s experiment on food safety problem

研究代表者

青木 恵子 (AOKI KEIKO)

大阪大学社会経済研究所・特任助教

研究者番号：10546732

研究成果の概要（和文）：安全で安心な食品の流通のために必要な情報公開の方法を検証するため、一般的な人々の嘘に対する意識を金銭的インセンティブがある実験環境で検証した。実験の結果は、嘘をつく割合は全体で約40%であった。匿名性で貰える金額が多く、対象者が若い人の場合が一番嘘をつく割合が多かった（約50%）。相手の顔が見える場合は、匿名性の場合に比べて、嘘をついたことを自白する人が多い傾向が観察された。嘘をつかれて、その通りの行動をした（騙された）人の割合は、嘘をつかれた人達の中で約68%であった。騙された人は、実験の種類や個人属性に大きな差がなかったが、相手を信じる傾向が観察された。

研究成果の概要（英文）：The purpose in the study is to investigate the lying behavior under monetary incentive by using a modified deception game. In the experiment, participants consist of students in the Osaka University and residents around one. In the game, one person in a room and other person in another room interact with each other. The participants can earn more the real money when they tell a lie than when they tell the truth. The results are the followings. The percentage of the lying behavior is about 40% on average. The most percentage of the lying behavior is about 50% when participants are in anonymity condition and the most different payoff between pairs. In the face-to-face condition as compared to anonymity one, liars intend to confess the lying to persons in the pair. The percentage of deceived persons is about 68% among told a lie participants, which they intend to believe the partners even though they are told a lie.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010年度	960,000	288,000	1,248,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,030,000	609,000	2,639,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：応用経済学

キーワード：食品偽装事件、虚偽行為、実験経済学、匿名性

1. 研究開始当初の背景

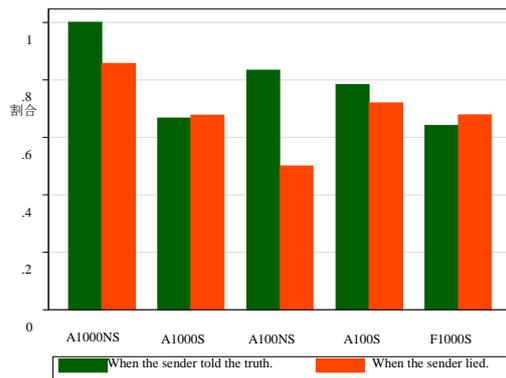
相次ぐ食品偽装事件は、消費者の食に対す

る不安を助長し、食料自給率が低い我が国に対して、安全で安心な食品の効率的流通を急

30,000 世帯を対象に、毎日・朝日・産経・読売の4誌の新聞広告にビラを混ぜて募集した。一般人の募集率は、約0.5%であった。実験報酬の平均は約1,500円であった。実験時間は、40分から60分であった。実験場所は、豊中キャンパスのStudents Commons、吹田キャンパスの社会経済研究所ラボの両方である。1実験の人数は、4人から18人であった。実験回数は47回であった。

4. 研究成果

1) 嘘をつく割合は全体で約40%であった。

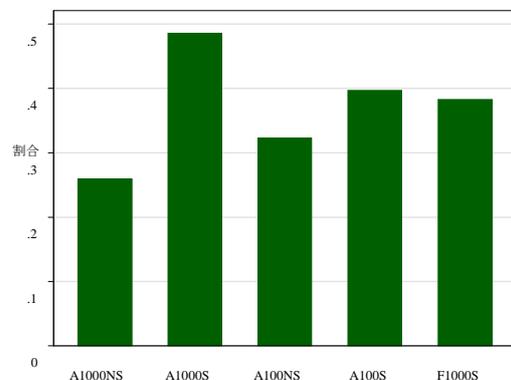


注釈：

- ・A1000NS：匿名性・うそをつくると利得が多い・一般人、A1000S：匿名性・うそをつくると利得が多い・学生、A100NS：匿名性・うそをつくると利得が少ない・一般人、A100S：匿名性・うそをつくると利得が少ない・学生、F1000S：顔が見える場合・うそをつくると利得が多い・学生。

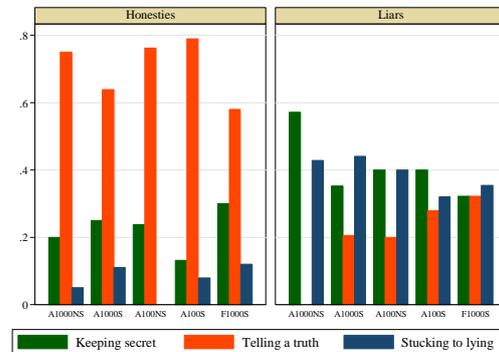
- ・緑の棒 (When the sender told the truth)：正しいメッセージを送った人、赤の棒 (When the sender lied)：うそのメッセージを送った人。

2) 匿名性で貰える金額が多く、対象者が学生の場合 (A1000S) が一番嘘をつく割合が多かった (約50%)。



3) どの場合でも、正しいメッセージを送った人は自分の正しさを主張する傾向が観察された。一方、うそのメッセージを送った人は、黙っているか、あるいはさらにうそをつく傾向が観察された。

4) 相手の顔が見える場合は、匿名性の場合に比べて、嘘をついたことを自白する人が多い傾向が観察された。



注釈：

- ・Honesties：正しいメッセージを送った人のグループ、Liars：うそのメッセージを送った人のグループ。

- ・Keeping Secret：何もメッセージを送らない、Telling a truth：正しいメッセージを送った人はメッセージ3)と4)、うそのメッセージを送った人はメッセージ1)と2)、Sticking lying：正しいメッセージを送った人はメッセージ1)と2)、うそのメッセージを送った人はメッセージ3)と4)。

5) 嘘をつかれて、その通りの行動をした (騙された) 人の割合は、嘘をつかれた人達の中で約68%であった。騙された人は、実験の種類や個人属性に大きな差がなかったが、相手を信じる傾向が観察された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計2件)

① 瀧俊毅, 青木恵子, 他8名、2010、大阪府泉南地域における選択型実験法を用いた妊婦の分娩施設選択に影響する要因分析、医療と社会 20 (2) 185-197.

② Keiko Aoki, Junyi Shen, Tatsuyoshi Saijo, 2010, Consumer Reaction to Information on Food Additives: Evidence from an Eating Experiment and a Field Survey, Journal of Economic Behavior and Organization 73: 433-438.

〔学会発表〕 (計2件)

①Aoki, K., K. Akai, and K. Onoshiro, Deception and confession: Experimental evidence from a deception game in Japan, Economic Science Association World Meeting, 2010.7.9., University of Copenhagen (Denmark)

②Aoki, K., K. Akai, and K. Onoshiro, Deception and confession: Experimental evidence from a deception game in Japan, 日本経済学会2010年度秋季大会, 2010.9.18., 関西学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 恵子 (AOKI KEIKO)

大阪大学・社会経済研究所・特任助教

研究者番号：10546732